

「幼稚園真諦」を読む

—「幼稚園教育の在り方について」と対応させて—

津 守 真

これは、昨年十二月二十二日に、東京都私立幼稚園協会で行った講演を書き直したものです。

はじめに

「幼稚園真諦^{*1}」は、昭和8年に東京女子高等師範学校の夏期講習会でなされた倉橋惣三の講演で、翌昭和9年に「幼稚園保育法真諦」として出版されました。戦後、昭和28年に復

刊されました。東山魁夷の絵を表紙にした小さな美しい本です。初版には誘導保育の実際例が付いていますが、復刊ではその部分は省かれています。

今回、私は、昨年9月に文部省より出された報告書「幼稚園教育の在り方について」^{*2}と対応させて、「幼稚園真諦」を読むという課題を与えられて嬉しく思っています。この両者はその成立において全く関係のないものです。前者は半世紀以上に書かれた倉橋惣三の書物であり、後者は、幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議という公的機関で大勢の委員の協議によって作られた報告書です。ただ、いずれも、幼児教育とは何かという根本問題を問うている点で共通です。今回、私は、私自身の独断的な読み方で、両者を対応させてみたいと思います。

「幼稚園真諦」が刊行されたのは、すでに述べたように、昭和9年であり、現代までの間に、第二次世界大戦と敗戦という大きな社会的転換期をはさんでいます。戦後昭和23年に「保育要領」が、昭和31年には「幼稚園教育要領」が刊行され、その間、昭和30年に倉橋惣三は死去されました。その後幼稚園は急激に増大し、高度成長期の幼児教育の時代を迎え、昭和39年には幼稚園教育要領が改訂され、そして現代、高度技術化の時代、幼児減少の時期となっています。このように幾多の社会変化を間にさしはさみ、この書物は、現代といかにかかわるのでありましょうか。

私は、この書物と現代との橋渡しをするものとして、昭和22年「^{*3}幼児の教育」第64巻5号より掲載された、倉橋惣三による「学校教育法における幼稚園」という文章を中間にい

れて、現代につなげたいと思います。倉橋惣三は、戦後直後、昭和21年に発足した教育刷新委員会の委員として、教育基本法、学校教育法の制定に尽力されました。この委員会は安倍能成を委員長とし、南原繁、小宮豊隆、城戸幡太郎、森戸辰男等々を委員として、戦後の新しい日本の教育の根本問題を議した重要な機関です。多くの有名人が名を連ねているというだけではなく、これらの人々が敗戦という日本人に共通の未曾有の体験を基として、日本の復興のために、教育の原点に立ちもどって考えようとする、尋常ではない真剣なエネルギーが注がれたと察せられる特別な委員会と私は考えます。教育基本法および学校教育法の誕生したばかりのときの、この倉橋惣三の解説は、全体をつくしたものではありません。幼児教育の観点から重点的にとり上げたものですが、いまこれを読み直すとき戦後四十年を経た間に私共の間から失われかけている教育の原点に対する思考を思い起させてくれるように思います。

今回、文部省から報告された「幼稚園教育の在り方について」は昭和六十年の現代において将来を望み見つつ、幼稚園教育の基本となる事柄について、「共通理解が得られる」点は何であるかを課題としています。それぞれの委員なりに、幼児教育の原点に向って考えようとしたときに、このような表現で文章化されたと考えてよいでしょう。

いうまでもなく、この三者は相互に独立していますが、原点にもどって考えようとする精神において、三者には共通なものがある。そこで私は、私個人の考えに立って、この三つを並べ、「幼稚園真諦」を読んでみたいと思います。

初版の序に、倉橋惣三は、真諦という題名はおこがましすぎる「僭称」ではないかと反省し、本当の幼児教育はこれだと断定はできない、ただ「自分としては」これ以上動かないという考えに達したのだと述べています。著者は幼稚園に久しく身をおいて、「疑惑と探究と、又いつも付きまとう躊躇とを経て、やっとここに落ちついた考え方」だと言います。これは、保育の実際を知る人のことばだと思います、毎年、毎日、子どもにふれるごとに違った毎日であり、保育する人は、毎日新たなことに出会って、自分として考え直さなければなりません。何か絶対的な規準があつて、それに従つてやればよいというような、そういうものではありません。ところが、日に違う毎日を買いて、変らないものがあります。前者は保育の目に見える部分であり、後者は、保育者の心の中にあつて、外からは見えない部分です。いつも保育者の心の中で温められ考えつづけられているものがあつて、それが日の子どもにふれて具体的に動き出すのです。それが何であるかという、ことばでこれと云い切ることはむづかしい。愛と云つても、真実と云つても、そうには違ひないが、抽象的すぎて、すぐには生きてはたらかない。日日の保育の実際の中で、疑いつつ、探究し、ためらいつつ次第に落ち着いた考えをもつに至る、子どもを育てる人の、自分自身の形成と修練にかかわることです。自分とは違った子どもと一緒に生きる生活形成するのにふさわしく、自分自身が成長しつつ、作られてゆく考え方です。「幼児教育の在り方」の中で、しばしば言及される「創意工夫」というのはこのことだと私は考えます。

次に、私は、Ⅰ 幼稚園教育の基本についての共通理解、Ⅱ 教育内容の二つに大別して、それぞれの問題について述べようと思います。Ⅰについては、1 教育における目的と対象 2 幼児の生活 3 保育者（教師）の役割と生活 4 保育の過程と結果 Ⅱについては、1 健康で幸福な生活の体験 2 自己の確立から他者と共同の生活の体験へ 3 自然との直接体験と分けて述べます。

Ⅰ 幼稚園の基本についての共通理解

1 教育における目的と対象

日日の保育の実践において、教育の目的あるいは目標を明確にして、たえずそれを頭において子どもを引張ってゆくのが教育であるという考え方が、世の中には根深くあります。それに対して、子どもを一方的に引張ってゆくのではなく、子どもに合わせて生活を作ってゆくことを考えるのが日日の実践であると、保育の実践家は多かれ少なかれそのように考えるでしょう。「幼稚園真諦」は、第一篇「幼稚園保育法」の冒頭からそのことを問題にして次のように述べます。

「教育といふことの考え方の上に於ても、ひたすら目的を本拠として教育に臨んで行くか、対象の特質に基いて教育に臨んで行くかという教育態度の差違によって、相違が起つて来るのであります。……つまり、目的へ対象をはめていくか、対象へ目的を現わしてい

くか、その態度の別によって大きな相違が起つて来るのです。」と。「これは必ずしも教育ばかりでなく、人と人との間にいつでもある二つの態度の別で、何ごとでも、自分の意見をもとにして他に持ちかけていく人もあるし、全然とまででないとしても、己を後にして先づ相手を生かしていこうとする人もある。」と更につけ加えられます。

この二つの態度の違いは、「幼稚園真諦」を一貫しているテーマともいえると思います。くり返し、このテーマがあらわれます。教育熱心という場合にも、教育目的に熱心な人と、対象である相手を尊重することをまず考える人があることが指摘されます。前者の場合には、子どもを良くするという大義名分があつても、おとなが子どもを支配することになりがちです。後者は、自分のことは後まわしにして、徐ろに、慎しやかに、相手を生かそうとする。年齢のことを考えたときにも、幼いほど、目的の方へ引張ってこななければならないと考える人が多いが、それは全く逆ではないか、と著者は主張し、「相手が幼ければ幼い程、対象の方へこっちら手を伸べていくのでなければならぬのではありますまいか。」とのべます。目的と対象という二つの極の間を、疑い、揺れ動きながら、保育の実践においては、対象の特質に基いて教育に臨むというところに落着いてゆきます。そして、「以上、幼稚園の保育は、教育の色々の種類の中でも、特に対象本位に、実に対象本位に、計画されていくべきものである。」と結ばれます。

このことは、幼稚園教育の目的を軽視するわけではありません。「幼稚園教育には、幼稚園教育としての、厳かな重大な目的があります。それをわれわれは一刻も失わない。」と

も述べられる。その蔽かな目的とは何かということ、教育基本法を解説した、「学校教育法における幼稚園」の中で、一層明らかにされてゆきます。

教育基本法の第一条には、「第一条（教育の目的） 教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として……」と教育の目的を明瞭に述べています。この中で、「人格の完成をめざし」という点について、倉橋惣三は詳しく論じ、次のように述べます。「多くの人格論は、人格の完成したところに就ていう。つまり出来上った人格である。しかし出来上った上のことばかりでなく、今がもつ可能性に立脚して云う意味では、出来上った人格の形よりも、その構成要素が大切である。出来上った形で云う時は『格』と云う字が大切な意味をもつ。しかしだんだん出来て行くであろうという今では『人』と云う字が根本である。」

ここでいう「人格の完成」とは何かというと、すべての人に共通する、でき上った形としての人格ではなく、それぞれの人に、それぞれの完成があるという考え方が根本にあると思います。ある規準に照して完全と云える人格はだれにもありうるものではない。むしろ、私共めいめいが、一生涯かかって成就する、それぞれに應じての完成です。そのような意味では、だれにでも人格の完成があります。幼児教育が目的とするところは、このように大きな目で見通したときの、それぞれの子どもの人格の完成への最初の部分と云ってよいでしょう。

更に、ここでは、「今がもつ可能性」が強調されています。すなわち、完成とは最終段階のことだけをいうのではなく、そこに至るどの時点の今をとつても、それが完成への可能性をはらんでいる。どの時期にもそれなりの成熟があると云つてもよいでしょう。赤ん坊は能力は未熟かもしれないけれども、赤ん坊なりの成熟がある。それに対して、ある能力がいかに進んでいても、その子どもが、不完全燃焼のような状態で不満のうちに日を過ぎていたら、その時期としての成熟をしていないと云えるでしょう。それぞれの時期に完成に向う一歩があるのであって、そこを見過したら、将来の完成も覚つかなくなる。幼児期という「今」では、人格のうち、未だ形にならない『人』の充実がたいせつなのだと言橋は強調します。そして更に次のことを付け加えます。

「私達の幼稚園では、この四月新たに幼児を受取ったが『人格』としてちゃんとしたのは一人もいない。しかし格こそ出来ないが『人間』であることは実にいきいきと充分に感じた。元来幼稚園での私達の楽しみは、生の人間性にぶつかることである。それを人間性と云おう。……人間性は実に溢れこぼれるほど豊かであり、形をなさないで漂いみなぎっている。この人間性にこそ将来の人格が今から目ざされる。そうしてこの人間性の発展にこそ人格が期待されるのである。」と。

私共が心を開いて幼児に接したときには、だれにでも体験される、溢れこぼれるほどにいきいきとした生の人間性が、幼児期の人間そのもので、この人間性が発展して人格になってゆくのであることが述べられています。それぞれの子どものうちにある、このいきいき

とした生命性に着目し、尊重しなかったら、幼児期の教育は考えられません。

さて、ここで、「幼稚園真諦」に述べられた目的と対象についても一度ふり返ってみましょう。その場合の目的を本拠として教育に臨むとは実践において、子どもをよく見ないでおとなの頭にある期待像、すなわち形を先にする態度と云えるでしょう。対象の特質に基いて教育に臨むというのは、形にはまる以前のいきいきとした人間性そのものを尊重する態度です。そしてこの後者は、人格の完成を目ざすという、教育の一番大きな目的を、幼児期におろしたものにほかなりません。

「幼稚園教育の在り方について」の中で、「Ⅳ改善の視点、1幼稚園では、何を意図して、どのように教育が行われるのかということが理解しやすいものとなるように、幼稚園教育の基本となる次のような事柄について共通理解が得られるよう具体的手がかりを示す必要がある。」として四項目があげられています。その第一は「(1)幼稚園教育は幼児の主体的な生活を中心に展開されるものであること」とされています。

すなわち、幼稚園は、幼児が生きる場であることです。これから生涯かかって自らの人生を完うしてゆくその第一歩を生きる場所が幼稚園であって、それぞれの子どもにその可能性を開くのが幼児教育であると云ってよいのだと私は考えます。

最初に述べたように、これは大勢の人の合議によって作られた報告書ですから、それぞれの人によって違った解説がなされるでしょう。私は、幼児の主体的な生活を中心にとい

うことは、教師の期待する目的に子どもをはめていくのではなく、「幼稚園真諦」で主張されている、「対象（子ども）へ目的を現わしていく」という態度につなげて考えることができると思います。人格の完成という教育の目的は、幼児の主體的な生活を尊重してはじめて実現されるものであります。

(つづく)

- * 1 倉橋惣三「幼稚園真諦」倉橋惣三選集第一巻 フレーベル館
- * 2 文部省「幼稚園教育の在り方について」昭61
- * 3 倉橋惣三「学校教育法における幼稚園」幼児の教育 第64巻5号18頁 昭22

(愛育養護学校)